現代行動科学会誌　第39号，１－10（2023）

【論文】

青年期におけるアニミズム心性がもつ臨床心理学的意義の検討

石戸谷　千里（岩手大学大学院総合科学研究科）
川原　正広（岩手大学人文社会科学部）

Ⅰ．問題と目的

現代社会において私たちは多くの「モノ」に囲まれながら生活を送っている。幼少期では特に、身の回りにある「モノ」が生命をもって活動していると感じた経験が多いのではないだろうか。花が歌う、太陽が笑う、ぬいぐるみや人形が喋る、というように本当は生命や心がない物体にもかかわらず「生きていて心がある」と感じる現象は子どもにとって珍しいものではない。しかし、子どもの頃抱いていた感覚は私たちが肉体的・精神的に成長するにしたがって変化し、身の回りの全ての対象に関するより本質的な生物的概念を獲得するようになる。そして生きていないものを「生きている」と考える感性は過去のものとして失われていくとされる。

Piaget(1926)はこの心理的特徴を「アニミズム」と名づけた。つまり、「生命のないものに生命を認めたり、意識や意志などの心の働きを認めたりする幼児の心理的特徴」を指す。しかし、元来の「アニミズム」は心理的特徴を示す用語ではなく、宗教形態を表す概念(Tylor,1871)として文化人類学や宗教学の領域で用いられた言葉であった。宗教の枠組みではモノや自然物に宿る魂や神の存在への信念が「アニミズム」の指し示す意味である。一方Piaget(1926)は元来の「アニミズム」を子どもの発達にあてはめて心理学における定義とし、アニミズム心性は心の未熟な側面であり次第に脱却していくものと否定的に考えた。ゆえに成長するにつれアニミズム心性は消失することが正常であり適応的であるという考えが浸透していることは否めない。しかし、アニミズム心性は非生物に対する心的属性の付与が年中児に比べ他者理解の力が備わってくる年長児で見られる（藤崎・倉田・麻生，2007）こと、自己中心性が高い子どもにとってアニミズム心性を持つことは自分自身を客観視するきっかけになる（松崎，2008）ことが主張されている。このような知見を考慮すると、アニミズム心性は心理的成長に欠かせない心的要素ともいえるだろう。

また末田(2020)は、Piagetが唱えるような幼児特有の未熟な思考形態としてのアニミズム心性を否定し、アニミズム心性を人間の普遍的な知覚様式であると主張している。アニミズム心性は、生命認識の有無は異なるが、状況や対象、個人の属性などあらゆる要因によって成人でも生じることが伴・高橋(2016)や伊藤(2011)などの研究によって指摘されている。成人のアニミズム心性がもつ機能について池内(2006)は、形見はアニミズム的精神としてモノに所有者の魂が吹き込まれているものとし、それが喪失対象との絆を心理的に継続させる上で重要であると主張している。伊藤(1994)は、人間はアニミズム的な信仰に

よって神や仏と親密な関係をむすび、日常生活の中で直面した問題を解決しようとすると述べている。したがって、アニミズム心性にはモノを介在して個人や神仏との関係を構築・維持し、日常での葛藤解決や喪失から安らぎを得る機能を持つと考えられる。しかしながら、未だアニミズム心性がもつ社会的な役割や機能的意義に焦点を当てた研究は少ない。幼少期にアニミズム心性が生じた経験やアニミズム心性の高さが個人の精神健康にとって重要な役割をもつことを示すことができれば、アニミズム心性を活性化する経験や教育が子どもの心理的成長を促すものとして臨床心理学的な意義を持つことを示すことができるだろう。また、アニミズム心性の高さは共感性の高さと関係することが示されており（末田・藤田,2012）、その感受性の高さによっては精神的な疲労が生じやすい者や、成人でありながらモノに生命や心の存在を感じてしまう自分の感性を他者と比較し未熟ではないかと疑う者も少なくないと考えられる。したがって本研究でアニミズム心性が持つ臨床心理学的意義を明らかにすることは、そのような否定的な認知を修正し、日常生活を過ごす上で励みとなることが推察される。

なお、成人のアニミズム研究は、池内（2010）のように青年期から高齢期まで幅広い年齢を対象としているものが多く、青年期のみに焦点を当てたものはほとんど見当たらない。そこで本研究では、青年期（本研究では 18 歳～25 歳とする）におけるアニミズム心性の特徴を示したうえで、アニミズム心性がもつ臨床心理学的意義を検討することを目的とする。また本研究におけるアニミズム心性は、池内(2010)を参考として「実際に生を認めている訳ではなくとも、無生物に対して生命や心の存在を感じる心性」と定義する。

Ⅱ．方法

⑴ 目的

青年期に生じるアニミズム心性の特徴を明らかにするとともに、青年期に生じるアニミズム心性と精神的健康の状態や対人葛藤場面における葛藤解決能力との関連について量的な検討を行う。

⑵ 調査対象者

調査対象者は 18 歳～25 歳の青年期の男女 159 名（男性 54 名、女性 104 名、その他 1 名 M=19.97、SD=1.67）であった。

⑶ 質問紙

成人用アニミズム尺度：個人のアニミズム心性の強さを測定するために、池内(2010)が作成した成人用アニミズム尺度を用いた。成人用アニミズム尺度は自然物を神とみなしたり、自然物に神が宿っているとみなす傾向を測定する「自然物の神格化」尺度、モノを現

在の所有者や過去の所有者の分身とみなす傾向を測定する「所有者の分身化」尺度、所有物に対して人間と同じような感情を抱く傾向を測定する「所有物の擬人化」尺度の 3 つの下位尺度（11 項目）によって構成された尺度であった。本研究ではそれぞれの質問項目の内容が自分にどの程度あてはまるかを「１：全くあてはまらない」～「５：非常にあてはまる」の 5 件法にて回答することを求めた。

対象物の生物性に関する評価尺度：青年期においてアニミズム心性が生じやすい対象物の特徴を把握するため、アニミズム反応を測定した先行研究(Crowell & Dole,1957, Dennis,1957, 池内,2010)において用いられた対象物に著者が独自に選定した対象物を加え、その対象物の生物性（無生物/生物）について判断する尺度（24 項目）を作成した。そしてその質問項目に生命や心の存在を感じるか否かについて「１：全く感じない」～「５：非常に感じる」の 5 件法にて回答することを求めた。

アニミズム経験に関する質問項目：無生物に生命や心が存在すると感じた経験の有無、年齢、生命や心を感じた対象物、アニミズム経験に関連するエピソードについて自由記述形式で回答を求めた。

心理的ウェルビーイング尺度：精神健康の状態を測定する尺度として西田(2000)が作成した心理的ウェルビーイング尺度を用いた。心理的ウェルビーイング尺度は新しい経験に向けて開かれている感覚の程度を問う「人格的成長」尺度、人生における目的と方向性の感覚の程度を問う「人生における目的」尺度、自己を決定し、自分の行動を調整できている感覚の程度を問う「自律性」尺度、自己を受け入れる感覚の程度を問う「自己受容」尺度、複雑な周囲の環境を統制できる感覚の程度を問う「環境制御力」尺度、信頼できる他者関係を築くことができている感覚の程度を問う「積極的な他者関係」尺度の 6 つの下位尺度によって構成された尺度であった（43 項目）。本研究ではそれぞれの質問項目の内容が自分にどの程度当てはまるかを「１：全くあてはまらない」～「５：非常にあてはまる」の 5 件法にて回答することを求めた。

統合的葛藤解決スキル尺度：対人関係における葛藤解決スキルを測定する尺度として、益子(2013)が作成した統合的葛藤解決スキル尺度を用いた。統合的葛藤解決スキル尺度は、自分の考えや価値観を伝える時に丁寧な表現を用いる傾向を測定する「丁寧な自己表現」尺度、葛藤場面において相手に粘り強く関わろうとする傾向を測定する「粘り強さ」尺度、会話場面で自己主張を控え相手の話を聞き入れようとする傾向を測定する「受容・共感」尺度、相手の気持ちや願いを察して配慮しようとする傾向を測定する「統合的志向」尺度の 4 つの下位尺度（16 項目）によって構成された尺度であった。本研究では質問項目の内容が現在の自分にどの程度あてはまるか「１：全く当てはまらない」～「５：とてもよくあてはまる」の 5 件法にて回答することを求めた。

(4) 調査手続きと倫理的配慮

調査は日本心理学会倫理規定（2009）に即して行われた。調査フォームの冒頭には倫理規定に基づいて作成された調査の目的や内容に関する説明、調査参加への任意性に関する説明、個人情報の保護に関する説明が明記されていた。調査対象者には調査者からインフォームドコンセントとして調査フォームの冒頭に記載されていた内容が口頭で説明され、調査対象者は説明があった内容を一緒に黙読することが求められた。そして研究協力の同意が得られた調査対象者に対してのみ調査が行われた。

調査は google フォームを用いて実施された。質問紙への回答は調査対象者のペースに委ねられたが、おおむね 20 分程度であった。

Ⅲ. 結果

⑴ 調査対象者の割合

調査対象者 159 名のうち男性は 54 名（33.5%）、女性は 104 名（65.8%）、その他 1 名（0.7%）であった。また、アニミズム経験に関する質問項目において、子どもの頃から現在までに「本当は生きていないが命や心がある（またはそのような気がする）と感じていたもの（感じているもの）」があると回答した人は 62.7%、ないと回答した人は 37.3%であった。なお、アニミズム経験があると回答した人のうち、本当は生きていないモノに命や心がある（またはそのような気がする）と現在も感じている人の割合は約 26%であった。

⑵ 成人用アニミズム心性尺度得点に関する分散分析の結果

成人用アニミズム心性尺度に含まれる 3 つの下位尺度について平均得点を算出し、1 要因分散分析を行った。その結果、アニミズム心性の種類の主効果が有意であった（$F(2, 316)=54.173$, $p<.01$）。多重比較を行ったところ、「自然物の神格化」尺度と「所有者の分身化」尺度の間には 1%水準で、「自然物の神格化」尺度と「所有物の擬人化」尺度の間、「所有者の分身化」尺度と「所有物の擬人化」尺度の間にはそれぞれ 5%水準で有意な差が認められ、「所有者の分身化」尺度、「所有物の擬人化」尺度、「自然物の神格化」尺度の順に得点が高かった。

⑶ 対象物の生物性に関する評価尺度の因子分析結果

対象物の生物性に関する評価尺度の 24 項目について因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行い、尺度の因子構造について検討を行った。最大因子負荷量が.35 以下の項目や.30 以上の多重負荷をもつ項目を削除しながら因子分析を繰り返したところ、最終的に 3 因子（20 項目）の因子構造が得られた（表 1）。

第１因子には、時計やスニーカー、スマートフォンといった普段身に着ける道具や、テーブルや雲、信号機といったしばしば日常場面で目にする対象物が分類された。そのため第１因子を「日常生活の一部」と命名した。第２因子には、マネキンやテディベアといった生物を模したモノの対象物が分類された。そのため第２因子を「疑似的な生物」と命名した。第３因子には、ウニや観葉植物など動きをもたない自然物が分類された。そのため第３因子を「動きのない自然物」と命名した。それぞれの因子の信頼性についてクロンバックの α 係数を算出したところ、各因子のα係数は.814～.905 であり十分な内的整合性が示された。

表１　対象物の生物性に関する評価尺度の因子分析結果

項目	因子 F1	F2	F3
日常生活の一部　α=.905			
スプーン	**.999**	-.056	-.073
信号機	**.922**	-.091	-.075
クッキー	**.903**	-.111	-.077
ボールペン	**.814**	.060	.015
スマートフォン	**.663**	.133	-.032
スニーカー	**.647**	.159	-.012
洗濯機	**.462**	.206	.170
テーブル	**.398**	.194	.194
時計	**.394**	.053	.242
雲	**.363**	-.089	.298
擬似的な生物　α=.875			
女の子の人形	-.045	**.981**	-.082
テディベア	-.086	**.932**	.041
マネキン	.066	**.656**	-.149
人型ロボット	.032	**.615**	.012
掃除ロボット	.114	**.574**	.119
動きのない自然物　α=.814			
木	-.057	.013	**.851**
観葉植物	-.119	.058	**.802**
キノコ	.055	-.196	**.748**
ウニ	-.045	.031	**.576**
太陽	.231	-.004	**.444**
Ⅰ	—	.542	.487
Ⅱ		—	.376
Ⅲ			—

(4)　対象物の特徴によるアニミズム心性の強さ

因子分析によって得られたアニミズム対象物における「日常生活の一部」因子、「擬似的な生物」因子、「動きのない自然物」因子について対象物に命や心があると感じる強さの平均得点を算出し、１要因分散分析を行った。その結果、対象物の主効果が有意であった（$F(2, 316)=183.70$, $p<.01$）。多重比較の結果、いずれの因子の間にも 1%水

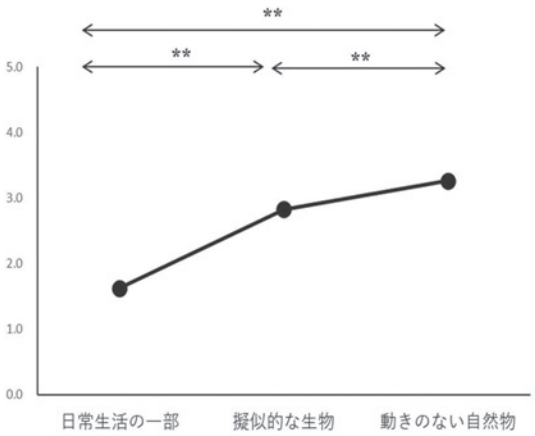

図１　対象物に抱くアニミズム心性の強さの比較

準で有意な得点の差が認められ、「動きのない自然物」因子、「擬似的な生物」因子、「日常生活の一部」因子の順に得点が高かった（図１）。

⑸　アニミズム経験の有無が精神的健康及び対人葛藤解決スキルに与える影響

アニミズム経験の有無に関する質問項目の結果から、調査対象者をアニミズム経験が「ある」群と「ない」群に分類し、心理的ウェルビーイング尺度の各下位尺度得点について対応のないｔ検定を行った。その結果「積極的な他者関係」尺度において両群の間に得点の有意な差が認められ（$t(157)=2.35$，$p<.05$）、アニミズム経験がある人はない人と比較して「積極的な他者関係」尺度の得点が高かった（図２）。

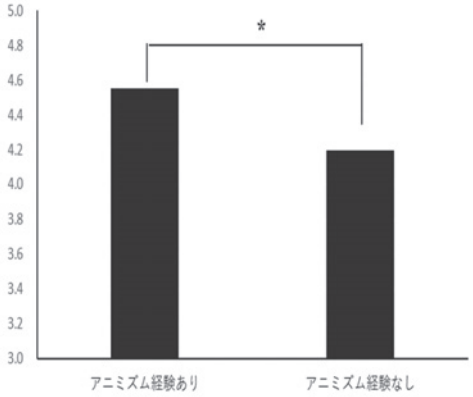

図２　アニミズム経験の有無による「積極的な他者関係」尺度得点の比較

また、統合的葛藤解決スキル尺度の各下位尺度得点に関しても対応のないｔ検定を行ったところ、「丁寧な自己表現」尺度と「統合的志向」尺度において両群の間に得点の有意な差が認められ（$t(157)=2.23$，$p<.05$，$t(157)=2.04$，$p<.05$）、アニミズム経験がある人はない人と比較して、「丁寧な自己表現」尺度と「統合的志向」尺度の得点が高かった（図３、図４）。

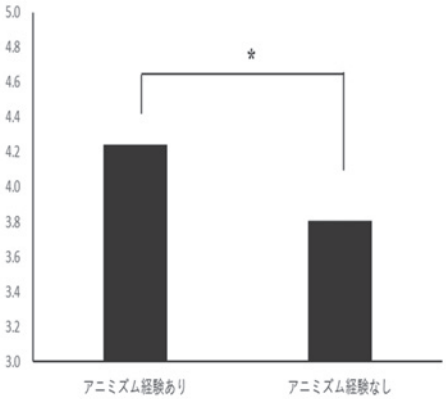

図３　アニミズム経験の有無による「丁寧な自己表現」尺度得点の比較

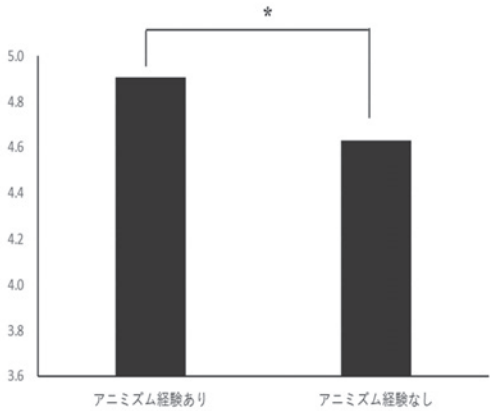

図４　アニミズム経験の有無による「統合的志向」尺度得点の比較

⑹　アニミズム心性の高さが精神健康及び対人葛藤解決スキルに与える影響

成人用アニミズム心性尺度の全ての質問項目の総得点を個人のアニミズム心性の強さを示す指標として算出した。そして調査対象者を総得点の平均値より得点が高かった「アニミズム高群」と得点が低かった「アニミズム低群」に分類し、心理的ウェルビーイング尺

度の各下位尺度得点について対応のないｔ検定を行った。その結果、「自己受容」尺度において両群の間に得点の有意な差が認められ（$t(157)=3.01$, $p<.01$）、アニミズム心性が高い人は低い人と比較して「自己受容」尺度の得点が低かった（図５）。さらに、「環境制御力」尺度においても両群の間に得点の有意な差が認められ（$t(157)=2.19$, $p<.05$）、アニミズム心性が高い人は低い人と比較して「環境制御力」尺度の得点が低かった（図６）。

また、統合的葛藤解決スキル尺度の下位尺度得点に関しても同様に調査対象者を「アニミズム高群」と「アニミズム低群」に分類し、対応のないｔ検定を行った。その結果、「丁寧な自己表現」尺度において両群の間に得点の有意な差が見られ（$t(157)=-2.28$, $p<.05$）、アニミズム心性が高い人は低い人と比較して「丁寧な自己表現」尺度の得点が高かった（図７）。さらに、「粘り強さ」尺度においても両群の間に得点の有意な差が見られ（$t(157)=-2.88$, $p<.01$）、アニミズム心性が高い人は低い人と比較して、「粘り強さ」尺度の得点が高かった（図８）。

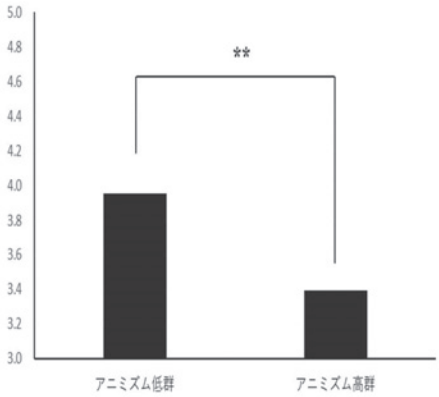

図５　アニミズム心性の高さによる「自己受容」尺度得点の比較

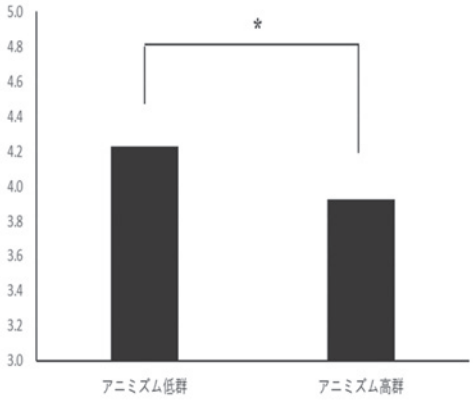

図６　アニミズム心性の高さによる「環境制御力」尺度得点の比較

Ⅳ．考察

⑴ 青年期におけるアニミズム心性の特徴

成人用アニミズム心性尺度の分散分析の結果から、青年期におけるアニミズム心性では対象物を所有者や作り手の分身のように感じる傾向、自分の持ち物を擬人化する傾向、自然物を神格化する傾向の順にその心性が高くなることが明らかとなった。その一方で、アニミズムを感じる対象物の調査からは、動かない自然物に対して最も強く生命や心を感じる傾向にあった。観葉植物や木は動かないものの、生命活動を行っている。生物の概念について理解が進んでいる青年期には、対象物の自己推進性や人間との類似性よりも、概念として生物に当てはまるかどうかの基準を用いて生命や心の存在を判断する傾向にあるこ

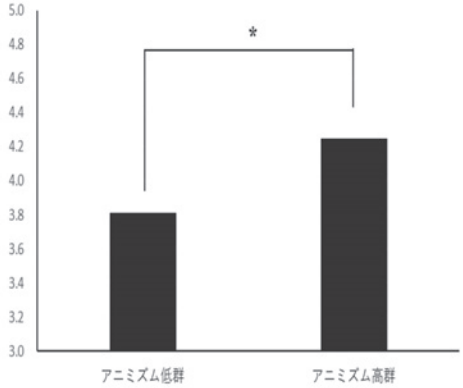

図７　アニミズム心性の高さによる「丁寧な自己表現」尺度得点の比較

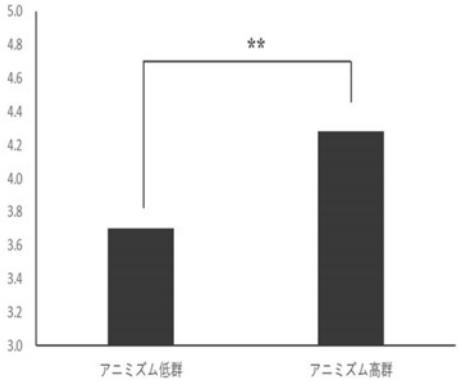

図８　アニミズム心性の高さによる「粘り強さ」尺度得点の比較

とが推察される。また成人用アニミズム尺度の「自然物の神格化」尺度は他の下位尺度と比較して得点が低い傾向にあった。この結果に関しては自然物に神や崇りの存在を感じることが宗教的であり、青年期という比較的若い年齢層では普段の生活の中で宗教的な価値観を意識する機会が少ないことが影響した可能性が考えられる。

⑵　アニミズム心性の高さが精神健康及び対人葛藤解決スキルに与える影響

アニミズム心性尺度の高群において対人葛藤スキル尺度の「粘り強さ」尺度の得点が高い結果が得られた。「粘り強さ」尺度の質問項目を見ると「相手との話し合いを避けない」や「うまくいっていない点について、相手と話し合おうという姿勢を見せる」など、相手に積極的に関わろうとする態度と解釈することができる質問項目が多く含まれている。したがってアニミズム心性尺度の高群において対人葛藤スキル尺度の「粘り強さ」尺度の得点が高い結果は、アニミズム心性の高さが葛藤解決場面においても相手に積極的に関わる姿勢に影響することを示していると推察される。またアニミズム心性が高い人はアニミズムの経験を有する人と同様に丁寧な自己表現を心がけていることが示された。この結果は、アニミズム心性が高い人は所有物や自然に存在する物をコミュニケーションの対象として意識することが多いため、自身の気持ちや願望を表現するスキルを高めやすい傾向にあることを示していると考えられる。

しかし本研究では同時に、アニミズム心性の高さが精神的健康に対して負の影響を与えることを示唆する結果も得られた。特に心理的ウェルビーイング尺度の「自己受容」尺度と「環境制御力」尺度ではアニミズム心性が高い人は低い人と比較して尺度の得点が低かった。自己受容の能力が低い結果に関しては、周囲の人物と違った感覚をもった自分をマイノリティと捉え、自己否定的になっていることが影響したと考えられる。また形見のような所有者の魂が吹き込まれていると感じやすい対象物は、対象物そのものが喪失対象を

思い出すきっかけとなり、精神健康の回復を困難にする可能性や、アニミズムを感じる対象が非日常・非現実への逃避を引き起こし、現実適応を困難にする可能性が先行研究において指摘されている（池内，2006，末田，2020）。したがって本研究で得られたアニミズム心性が高い人が環境制御力が低いことを示した結果からは、アニミズム心性の高さが周囲の環境に折り合いをつけて適応することを困難する可能性があることが示唆される。

Ⅴ．本研究から得られた青年期におけるアニミズム心性の臨床心理学的意義と今後の課題

本研究で得られた結果よりアニミズムを感じた経験やアニミズム心性の高さは、青年期における精神健康の状態や対人葛藤解決スキルを高める機能を持つことが明らかとなった。したがってアニミズム心性を活性化することが個人の精神発達や青年期の精神健康の状態に大きく影響することが予測される。

しかしその一方で本研究からは、青年期におけるアニミズム心性の高さが自己受容や周囲への適応力を低下させる機能も併せ持つことが示唆された。したがって、アニミズムを感じた経験を有する個人がその経験をどのように現実適応や心理的成長のために取り入れてきたかを詳しく検討する必要がある。また本研究は青年期のアニミズム心性について量的検討を行うことを研究の目的としたため、アニミズム経験に関する自由記述の結果は検討の対象としなかった。しかしながら、自由記述の中には幼少期と青年期ではアニミズム心性がもつ特性に違いがあることが示唆される記述が見られた。したがって、幼少期から青年期にかけてのアニミズム心性の変容プロセスが青年期の精神健康や対人葛藤解決スキルに与える影響についてインタビュー調査等を用いた質的な検討を行う必要があり、本研究における今後の課題としたい。

【引用文献】

伴碧・高橋英之(2016)．子どもの見かた・大人の見かた―幼児・大学生・高齢者を対象とした Agent 知覚の生涯発達的検討―　HAI シンポジウム 2016.

Crowell, D. H. & Dole, A. A. (1957). Animism and college students. *The Journal of Educational Research*, 50, 391-395.

Dennis, W. (1957). Animistic thinking among college and high school students in the Near East. *Journal of Educational Psychology*, 48, 193-198.

藤崎亜由子・倉田直美・麻生武(2007)．幼児はロボット犬をどう理解するか―発話型ロボットと行動型ロボットの比較から―　発達心理学研究，18，67-77.

池内裕美(2006)．喪失対象との継続的関係―形見の心的機能の検討を通して―　関西大学社会学部紀要，37，53-68.

池内裕美(2010)．成人のアニミズム的思考:自発的喪失としてのモノ供養の心理　社会心

理学研究，25，167-177.
伊藤幹治(1994)．日本社会におけるアニミズム的汎神論の世界　日本常民文化紀要，17，173-202.
伊藤俊樹(2011)．長期にわたるロボットとの接触体験がロボットイメージに与える影響について　神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，4，1-8.
益子洋人(2013)．大学生における統合的葛藤解決スキルと過剰適応との関連―過剰適応を「関係維持・対立回避的行動」と「本来感」から捉えて―　教育心理学研究，61，133-143.
松崎行代(2008)．学校教育における人形劇の教育的意義と課題：飯田市の学校における人形劇活動充実のために　飯田女子短期大学紀要，25，61-75.
日本心理学会（2009)．公益社団法人日本心理学会倫理規定　公益社団法人日本心理学会.
西田裕紀子(2000)．成人女性の多様なライフスタイルと心理的well-beingに関する研究　教育心理学研究,48,433-443.
Piaget，J.（1926)．*La représentation du monde chez l'enfant*. Alcan.（大伴茂訳（1955)．児童の世界観　同文書院）
末田啓二(2020)．アニミズム心性ははたして未熟な人格特性なのか？　甲子園短期大学紀要，38，1-6.
末田啓二・藤田裕一(2012)．児童用アニミズム心性尺度の因子構造　日本心理学会第76回大会発表論文集.
Tylor，E. B.(1871)．*Primitive Culture: Researches Into the Development of Mythology, Philosophy, Religion, Art, and Custom*. London：Murray.（比屋根安定訳(1962)．原始文化：神話・哲学・宗教・言語・芸能・風習に関する研究　誠信書房）